

看護学生を対象としたスポーツ救護ボランティア研修の試み —学生アンケートを用いた研修プログラムの改善—

大串晃弘¹⁾, 小林淳子²⁾, 上月翔太³⁾, 久保幸子¹⁾, 矢野英樹¹⁾, 三木俊貴¹⁾, 小川佳代¹⁾

四国大学看護学部¹⁾

国際医療福祉大学小田原保健医療学部²⁾

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室³⁾

1. 背景

近年、健康意識の高まりを反映し、ランニングなどスポーツを始める人が増加している一方で、スポーツ中の心臓突然死や熱中症などの発生が報告されている。それゆえ、競技の参加者が安全・安心して競技に取り組めるよう、スポーツ救護に携わる医療従事者には専門的な知識や技術が求められている。

スポーツイベントにおける救護体制を構築するうえでまず求められるのは、傷病者の発生現場に居合わせる可能性の高いすべての救護スタッフがファーストエイドを行えることである。しかし、スポーツ救護に携わる医療従事者の1人である看護師を対象としたスポーツ救護に関する研修は行われているが、体系的に専門的な知識や技術を学ぶ機会は限られており、大学などの基礎教育でも十分行われていないのが現状である。

以上のような状況を鑑み、本学では2020年度より看護学部の学生を対象に、「スポーツ救護ボランティア研修」を企画し、運営した。このような看護学生を対象としたスポーツ救護研修は国内に類例のない先進的な取り組みであるため、研修プログラムのさらなる検証と改善は不可欠である。それゆえ、2021年度のスポーツ救護ボランティア研修のプログラムをより充実させることを目的に、研修に参加した学生のアンケートの分析を行った。

2. 方法

2020年度のスポーツ救護ボランティア研修に参加したA大学看護学部の学生48名に対して無記名自記式アンケートを配布した。アンケート項目は、学年、性別、スポーツ経験といった基本情

報に加え、参加者が経験したことがある怪我や対処方法について知る機会、研修に対する態度や研修内容、運営に関する項目などを設けた。また、アンケートには授業や演習に対する意見、研修で印象的であったこと、今後取り扱ってほしい内容などを自由に記載する項目も設けた。アンケートは項目ごとに単純集計を行った。自由記載の項目は記載された内容を精読し、意味内容に注目しながら質的に分析を行った。本研究はA大学の研究倫理審査専門委員会の承認を経て実施した(承認番号2020030)。

3. 結果

スポーツ救護ボランティア研修に参加した学生は、1年生17人(35.4%)、2年生7人(14.6%)、3年生22人(45.8%)、4年生2人(4.2%)であった。スポーツ経験があると答えた学生は45人(93.8%)であった。スポーツ経験の内訳は、テニス・バドミントン・卓球が1番多く18人(37.5%)、次いで水泳16人(33.3%)、バレーボール9人(18.8%)であった。

研修に参加した学生が経験したことがある怪我は、すり傷39人(81.3%)、突き指30人(62.5%)、切り傷29人(60.4%)の順に多かった。

スポーツ救護ボランティア研修に参加した学生がスポーツ時の怪我や病気の対処について知る機会があったのは、打撲・捻挫へのRICE処置が23人(47.9%)、突き指や捻挫に対するテーピングが22人(45.8%)、熱中症の判断と対応は21人(43.8%)であった。

研修に対するアンケートでは、「私は意欲をもって研修に取り組んだ」、「研修の内容は興味深いものだった」と答えた学生は48人(100%)であ

った。また、「研修の内容について理解できた」と答えた学生は46人(95.8%)であり、「総合的に考えて研修は意義あるものだった」と答えた学生は47人(97.9%)であった。一方で「研修の授業や演習の時間は適切であった」と答えた学生は36人(76.6%)であり、「研修の開催時期は適切であった」と答えた学生は31人(64.6%)であった。

自由記載の分析では、研修の授業や演習の時間については、授業や演習の時間の長さは適切であると記載している学生もいたが、演習の時間が長かった、または短かったという意見もあった。開始時間については、もう少し早い時間帯で開催してほしいという意見が多かったが、実習中の学生も多いため、全学年が参加するためには遅い時間帯で開催した方がいい、という意見もあった。

研修の開催時期に関しては、3年生は実習期間と重なっていたため大変であったが、1,2年生は適切であったという意見があった。また、前期に開催した方がいいという意見がある一方で、1年生からはある程度知識がついた時なので後期の開催の方がいいという意見もあった。

研修に参加することで印象に残った事として、包帯やテーピングの巻き方、AEDの使い方などを挙げる学生が多かった。また、スポーツ救護特有である傷病者のケアの方法を学習できたことを挙げる学生も多く、看護学部のカリキュラムでは学習できない分野について学習できたことを挙げる意見が散見された。一方で、演習において他の学年の学生と話しながらか参加できたことが印象的であったという意見もあった。

4. 考察

2020年度のスポーツ救護ボランティア研修のプログラムは、研修に対するアンケートの結果より、全体的に肯定的な評価を得ることができたと考える。また、授業や演習を担当した教員への評価も非常に高く、参加した学生の満足度は高いと考えられた。自由記載の分析から、演習で実際に包帯やテーピング、AEDなどを用いたことが満足度を高めた要因の1つであると考えられた。

研修に参加した学生の大半はスポーツを経験していた。スポーツをしていた学生は、自身の経験によってスポーツ救護への高い関心をもっていると考えられる。研修プログラムをより拡充させるためには、学生が経験したことのあるスポーツや怪我、また怪我への対処法などの背景に焦点を当てることで、より学生のニーズに合ったプログラムになると考えられた。

自由記載では演習時間の短さを指摘するものが顕著であった。今回の研修に参加した学生が演習時間を短いと感じていることは、専門的な知識が深まった一方で、それを活かす演習の場が十分ではなく、技術の習得が不十分な状態で研修を修了していることを意味している。技術が不十分な状態でスポーツ救護に関わることで、適切な救護を傷病者に提供できなくなる可能性が懸念される。それゆえ、学生が実践的な技術に関する演習を十分行うことができるように、研修の運営プログラムを検討していく必要があると考える。

研修の開催時期や時間帯に関しては、アンケートでは全体と比べて評価が低かった。この背景には、国家試験の勉強や臨地実習、公共交通機関などの影響が考えられた。看護学部のカリキュラム上、全学年が負担なく参加できる研修開始時間を設定することは難しいため、研修に参加した学生の背景に合わせて開始時間を柔軟に検討していく必要があると思われた。

5. まとめ

スポーツに対する健康意識の高まりとスポーツ救護に関わる看護師への社会のニーズを踏まえ、2020年度に看護学部の学生を対象にスポーツ救護に関する研修の企画と運営を行った。研修に参加した学生のアンケートの結果では、研修のプログラムに対する評価は高かったが、さらに学生のニーズに答えるために、プログラムの再検討も必要であると考えられた。一方で、開催時期や開始時間などには課題が残る結果となった。スポーツ救護ボランティア研修を拡充させていくためには、これらの課題を明確化し、改善していく必要があると考える。